

千鳥が淵の櫻

たなか踏基

日本人は、古来花に四季折々の感懐を感じ、花を愛でる民族であるという。無意識の内に繊細な季節の移ろいに、自分自身の喜怒哀楽の思い出を紡いで重ねているのかもしれない。とりわけ春の訪れを告げる櫻に対する思は特別のようだ。それは、春という生命のみなざる季節に、濃密な櫻の精気を注ぎ込む女神の魔力のせいであろうか。

四月七日、東京で櫻の名所のひとつ、千鳥が淵の夜櫻見物に家内と出掛けた。わざわざ家内と洒落こんだのは、今回で二度目である。前回は昼間であったから、今度はぜひ、ライトアップされた夜櫻を観ようという家内の提案に折れたからである。地下鉄九段下を降りたこの辺りに、私は元々土地勘があった。私の元居た会社オフィスが富士見町の九段高校や暁星高校や白百合学園等のある文教地区界隈にあり、千鳥が淵も近くだったからである。しかし私は通勤には何時も反対側のJR飯田橋駅を利用した。オフィスまで歩いて十五分の距離に本社があった。春以外にも、千鳥が淵交差点から、八百丸の皇居堀端の英国大使館まで至る緑道を会社同僚と、時に一人で歩いた記憶がある。宴席を張って賑う靖国神社の櫻も、無名戦没者墓地のある此処千鳥が淵の櫻も所詮「櫻は櫻、いずれの櫻とて同じこと」と当時の櫻観が先入観となり、実のところ最初は家内の提案に余り気のりしなかった。

新宿駅南口をでて、都営新宿線に乗り換え九段下に着いたのは、そうかれこれ午後五時頃だっ

たかもしれない。地下鉄の駅は既に人で溢れていた。二番出口を上り最初武道館に至る道を左折、田安門から引き返しながら暮れなずむ櫻を眺めた。靖国神社の櫻を眺める人の群れが分かれて、大鳥居に至る歩道橋を渡って行く。家内と手を繋いで麹町消防署前の遊歩道を、押し合い庄し合いしながら流れに身を任せる。そうしないと逸れて迷子になりそうだったからである。左折して狭い緑道に入る個所に、柵が廻らしてあったためか、人の歩みはそこで完全に一時停滞する。がしかし、遊歩道に入る

この辺りが、今は無きフェアモントホテルのあった場所であろうか？現在マンションの建設が進んでいた。堀端に面したテイルムのあるこの大正時代の古風なホテルも時代の波に勝てず消え去ったのであるうか？多くのロンスを育んだであろう櫻とホテルの取り合わせは、今や大正の薫りや昭和レトロの感懐をも消し去ってしまったようだ。櫻の女神達もノスタルジックを惜しむかのごとく咲いていた。千鳥が淵戦没者墓苑は、A級B級の祀られる靖国神社と異なる性格を持って創立されたとい

岸のライトアップされて水面に映える櫻と、振り上げば天空を覆って微笑む櫻を対比して交互に視線を配り眺める余裕ができた。櫻の女神に息を呑む思いで暫し庄倒されていた。堀端の遊歩道に、ある種の妖気が満ち満ちて、あたかも群舞の少女が裸身をさらして、時を惜しむかのごとく桃色に咲き匂うのである。夜櫻の精気を受けてか、私は何故か身内に勇気が湧いて来る不思議な感懐に駆られていたのである。ライトアップの光源は、場所により時に青白く、時に淡く緋色にもえた。加えてカメラのフラッシュが女神の衣装を方々できわ立たせていた。思わず私は駄句を詠んでいた。

ここに五月に行われる千鳥が淵戦没者御霊の慰霊行事は、余り彼等の話題になっていない。ここに千鳥が淵の櫻ばかりでなく、今年は何故か関東の櫻はあつと言つ間に咲いて、あつと言つ間に散ってしまった。例年一週間から十日は楽しめる花見の行事も今年は馬鹿に短く感じられた。翌週花散らしの雨が東京界隈に降っていた。でも与謝野晶子の歌「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」の詩よりも、「ねがはくは花の下にて春しなむ、そのきさらぎの望月の頃」と歌い櫻の下で入寂した、放浪の歌人西行法師の詩を思い出してしまふ。匂いたつ艶やかさこそ無いが、単純で清楚な少女のように神秘的で、言葉に尽くせぬ余情を醸し出す、千鳥が淵の夜櫻の美を満喫できて幸せであった。それは皇居の掘割に、まるで女神達が身を投げるかのように枝を垂れる櫻に感動したためだけでなく、余情の美を感じ取れる齡となった証でもあったからである。

振り仰ぐ夜空櫻の気や揺るる・・・踏基
夜櫻のふるは物申ふ妖気かと
夜櫻の淵に女神の舞ふ宴
ライト曝す裸身櫻の太さかな
掘割の浮世女神の櫻垂れ
せつせつと雨を蹴散らす花かがり
散り急げしずもる刻や花万朵

了